

# PRI研究について

楽観主義から懐疑へ——北アメリカ研究者の見たPRI——

ロレンソ・メイエル

党の内外から——メキシコ人研究者の見たPRI——

ホセ・ルイス・レイナ

〔第三世界と世界政治〕研究会資料(五)・訳、ギエルモ・クアルトゥチ、蔵重 毅

(△研究会から▽ これから数回にわたってメキシコにおける社会科学の発達とその現状を紹介する論文の投稿を受けたいと思う。全てメキシコで最近刊行されたものである。そのなかには特定の対象をめぐる代表的研究をとりあげて批判するとともに、その対象自体に接近しようとするものもあれば(たとえば本号の論文)、メキシコにおける政治学、メキシコにおける社会学といったようにとりあげる文献を特定の対象を扱ったものに限定せず社会科学の各分野での活動を俯瞰しようとするものもある。もっとも、社会科学における方法論と研究の対象とは密接な関係にあり、たとえ「文献解題」でおさめようとしてもそれぞれの文献が扱う対象に言及せずにはおれないから、両者の相違は力点のおき方にある。いずれにしても、わが国のラテン・アメリカ研究が——したがってメキシコ研究も——ようやく盛んになるうとしている時(我田引水的に言えば、世界各地でのラテン・アメリカ研究から生まれたモデルが既成の

楽観から懐疑へ——北アメリカ研究者の見たPRI——

(一九) 一九

社会科学理論に少なからぬ影響を与えようとしている時)、それぞれの研究者がメキシコ社会のいかなる局面をどのような問題意識のもとにいかなる方法で分析しているのかを、いいかえれば、彼らの研究のレベルを大ざっぱにはあるが手近に知ることができるとすれば若干の意味があろう。本号の二つの論文はメキシコの政治システムの中核にある制度的革命党についての研究状況を――必ずしも全般にわたってはおらず、総合雑誌に発表されたものであるためややジャーナリスティックであるが――まとめたものであり、そのうちの一つはこれからの投稿のなかでは例外的に北アメリカ人の研究を独立させて扱っている。北アメリカ研究者の業績を全くぬきにしてメキシコ研究はありえない現状であるから、とりあげられた文献はわれわれにもなじみのあるものであるが、メキシコ人自身がそれらをどうみているのかは興味のあるところだろう。できれば本シリーズの最後にラテン・アメリカの社会科学全般をみわたした論文を掲載したいと考えている。

## 楽観から懐疑へ

### ――北アメリカ研究者の見たPRI――

ロレンソ・メイエル

メキシコとその政治的変遷はこれまで長い間北アメリカ研究者の好奇心と研究の対象になってきた。とくに一九一〇年の革命以後この傾向は著しい。メキシコ革命に関して最初にあらわれた体系的・学問的分析の多くが、クラ

ーク、シンプソン、タンネンバウムの著作が示しているように、北アメリカ人の手になるものであった。そのうちも隣国の教授や博士候補生は大量の著書、論文を雨あられのごとくわれわれにあげてきた。六〇年代の一時、メキシコについての社会科学的研究は北アメリカ人以外には立入禁止区域であるようにさえ思われた。バランスがわれわれの方に傾きはじめてのは最近のことである。それも、彼らの研究活動が下火になったからではなく、われわれの研究が盛んになったからである。そして今日また、石油資源の重要性のために、メキシコはブラボー川のむこう岸の社会学者、政治学者、経済学者によって切りぎざまれようとしている。このような事態にわれわれがいらだちをおぼえるのは当然である。しかし、手をつくねて見まもっているばかりでなく、それをわれわれにたいする挑戦として積極的に受けとめるべきであろう。今、彼らの研究を総括してみることに有益である。

メキシコ革命後北アメリカ研究者の注意をひいた現象の一つが、他のラテン・アメリカ諸国とは対照的にメキシコの政治システムが維持してきた安定性であったことは疑いない。この安定性の謎をとく鍵が、彼らの多数見解によれば、「公党」(el partido oficial)と通称されるPRI (Partido Revolucionario Institucional、制度的革命党)である。ここからPRIの研究に関心が集中した。以下、北アメリカの代表的研究者をとりあげ、彼らの考え方の枠組とその変化を見てみよう。

“昔々あるところに政党がありました” 上に述べた多数見解の基調を布いたのがイリノイ大学政治学教授スコット (Robert E. Scott) の著書 *Mexican Government in Transition* (U. of Illinois P., 1959) である。あへ

まで樂觀主義者であったスコットは、メキシコの政治システムは過渡的狀態にあり、この時期は急速に過ぎつつあるとした。メキシコの政治システムは「非西欧的」な——いかえれば「伝統的な」ものから「西欧的」なものに、本質的に先進資本主義諸国の政治システムに似たものに比較的短時日のうちに移行すると考えたのである。彼は近代化論者に共通してみられる仮説にたつてインタレスト・グループに焦点をあてる。すなわち、第二次大戦後のメキシコの経済成長はインタレスト・グループの分化増殖をうながし、大統領とPRIが従来もっていた支配力を低下せよというのである。大統領はもはや過去におけるような専制的な役割を果しておらず、基本的にはPRI内外の利益対立の調停者である。しかも、主要な利益対立と政策決定はPRIを通して行われている。スコットは、PRI内部で底辺からの圧力が増しているから、それだけ政策決定への参加もふくらむだろうと考えた。民主化の流れは停滞してはいないと思つたのである。多元的利益の存在、そして都市——メキシコにおいてもっとも近代的で「西欧化」した地域——における反対諸党の相対的な強さは中期的にみて真の二大政党制に向わせる力となろう。その結果生まれる反対政党はPRIと同種のものになるにちがいない。なぜなら、PRIに対抗するため多階級の非イデオロギー的になるだろうから。こうしてスコットが中期的に予測したのは、経済的近代化の結果として北アメリカとよく似た政党システムが生まれるということであった。資本主義的近代化が進めば進むほど旧来の権威主義は時代おくれとなり、メキシコの政治システムは今日西欧にみられる自由主義的多元主義に近づく。この結論はまさしく樂觀的な機能主義的近代化論から必然的に導き出されるものであった。

「メキシコは実験室である」 キューバ革命が成功しそれが急進化することによって、メキシコにたいする北ア

メリカの関心は高まった。時をおかずメキシコは社会主義キューバにかわる選択肢として描きだされたのである。一九六〇年末には北アメリカ学界の有力な「メヒカニスタ」の一人であるクライン (Howard Cline) が三年後に *Mexico, Revolution to Evolution* (Oxford U. P., 1963) として刊行されることになる研究を完成させていた。その中でクラインは、語義上の矛盾をさして気にとめず、メキシコの政治体制を「単一政党による民主主義」とよんだ。PRIは政治システムの中核にあるとともに、内部に異質なグループを含んでいよいよ複雑な構成になっている。各グループ間の調整は常に行なわれており、指導者もまた現実的な適応能力をもっている。このシステムは、メキシコ全体の社会階層、政治勢力を代表して党内に集約される各利益によく対応できるのではないか。クラインはそう判断したのである。彼にとって民主主義とは党内における各種利益の複雑な対立とその調整のことであった。避けがたい内部分裂、そこから生まれる複数政党システムなどに言及する必要を全く感じていない。「公党」による政治権力の独占がある期間続いていることは認めるが、それだからといって党内に現実的で効果のある民主主義の一形態がないわけではないと考えたのであり、しかも彼にとってはそのことだけで充分だったのである。

「フキャペリのつたてら」 一九六四年にブランドンバーグ (Frank Brandenburg) の *The Making of Modern Mexico* (Prentice Hall, 1964) が刊行された。ブランドンバーグは学者としてだけでなくメキシコに利害関係をもつ北アメリカ企業の顧問としてもこの国を熟知していた。一〇年にわたるメキシコ生活のうちに生まれた彼の研究は、一九一〇年革命の原因と結果を長期的視野のうちにとらえようとするものであった。精緻な理論のかわりに直接観察から得た多くの仮定に基づいたものであり、当時の一般的感情を抑制してもいない。彼の書物が発

表されたのは、ラテン・アメリカにおける、また第三世界一般における社会主義との闘いをめぐって北アメリカで議論が沸騰していた時であった。『進歩のための同盟』の黄金時代であり、『メキシコ・モデル』にたいするブランデンバーグの支援はそれ以前の研究者にもまして熱狂的であったといえよう。彼の現実主義的な見方からすれば、メキシコ『革命一家』の大義はラテン・アメリカだけでなく全発展途上国の手本であった。ブランデンバーグは民主主義のいかなる幻想にもおちいらなかった。メキシコの『自由主義的マキャベリズム』は真の政党制になじまない。権威主義は歴史の中にしっかりと根を下しており、この現実はず測しうる将来あらためられそうにない。しかし、低開発を克服するための国民的努力が展開されるなかで、メキシコの政治エリートは政治権力の独占と個人の自由の尊重とをうまくかみ合わせてきたとする。

PRI に関してはスコットの見解にはつきり反対しており、クラインの考え方もちがっている。すなわち、政策決定は党内で行なわれているのではない。それは『革命一家』という小さな仲間うち（大統領、主要閣僚、地方有力者、若干の労働運動幹部、巨大経済団体のトップ）の排他的特権に属する。ブランデンバーグ流の図式では、党の幹部は権力の階層の第二のレベルを占めるにすぎず、明らかにより上級の権力に服従しているのである。党そのものは決定された政策を実行にうつすための装置でしかなく、連邦・地方の官僚機構、軍部、弱小政党とともに第三のレベルに位置する。結局彼の考えでは、PRI は政策決定にたいし何らの影響をも与えておらず『革命一家』の行動を正当化する儀式の中でささやかな役割——必要ではあるが——を果しているにすぎない。

『放蕩息子の帰還』 論争は表面化した。一九六六年、シムット (Vincent Padgett) が *The Mexican Political*

System (Houghton Milin, 1966) を出し、「公党」の役割にたいする評価を回復しようとしたのである。メキシコの政治システムの特徴はその安定性にあるとパジェットは考えた。この命題を、メキシコの政治文化の特質、そのもとで政治システムに与えられている正当性、圧倒的に優勢な「公党」の存在、要求を有効に伝達しうるインタレスト・グループの能力、行政権力の強大さ、国民の多数に利益をもたらしている開発政策の存在、などによって説明した。こうしてPRIは大統領、インタレスト・グループと並んで再び最上位におかれることになった。

パジェットの分析はスコットのもの同様機能主義理論の固い枠を一步も出していない。政治システムの核心にある「大統領すじ」の意向に服従しているにもかかわらず、党は行政政府の単なる付属物ではなく利益集約のための欠くべからざる機構であるとされる。すなわち、PRIは利益集約装置、コミュニケーション回路、紛争調停者の役割を果し、さらに宣伝・選挙担当部局を通じて国民のコンセンサスを高めシステムにたいする正当性をとりつけている。パジェットにとってPRIはメキシコの政治システムの中心部であり、将来その自立性を高めうるものである。安定を維持することと個人の自由を制限せずに国民の多数のための社会改革を進めること、メキシコの政治システムはこの二つを同時に可能にしている。こう考えるパジェットはそれまでの研究者と同様将来を樂觀視していたといえる。

「いつかおののきまでいない」 一九七一年ニューメキシコ大学のニードラー (Martin Needler) が *Politics and Society in Mexico* (U. of New Mexico P., 1971) をあらわした。メキシコの政治システムが危機的状況におちいつていることがすでに明らかであったにもかかわらず、ニードラーの分析は政治システム一般についても、

PRIについても従来正統とされてきた見方を出していない。今回メキシコの政治システムは「単一支配政党」システムと定義された。党は経済的変化にもなる摩擦を最小限におさえて紛争をコントロールする役割を果たしている。その三つのセクターを通してメキシコ社会の主要利益を統合している。PRIの政策は三セクターの幹部、有力政治家、企業界代表それぞれの意見が調整された結果うちだされるものである。この間に腐敗の要素が存在するが、それは多かれ少なかれ一つの政治システムがより秩序ある安定したものにむかう過程においてはめずらしい現象ではない(たとえば一七世紀のイギリスや一九世紀のアメリカ合州国がそうであった)。ニードラーはメキシコの政治システムが過渡期にあるというスコットのテーゼを支持したわけである。メキシコが民主的に発展した社会にいたった時——これが支配グループのかかげる目標である——PRIは姿を消すであろう。そしてそのことがメキシコの「成功」の証左となるであろう。一九五九年にスコットがたてた命題は一九七一年にいたってもなおニードラーにとっては有効なのであった。

「夢の終り」 北アメリカの学界がメキシコの政治過程とその「公党」を好意的・楽観的に見た時代はニードラーでもって終る。同じ年にハンセン(Roger D. Hansen)の『The Politics of Mexican Development』(Johns Hopkins, 1971)とジョンソン(Kenneth F. Johnson)の『Mexican Democracy: a critical view』(Holt, 1971)が刊行されそれまでの見方をくつがえした。この頃までに北アメリカではラテン・アメリカに別のキューバが生れるのではないかという危惧は消えており、それだけメキシコをキューバにかわるモデルとして見る必要性が少なくなっていた。また一九六八年事件の結果、外国人研究者はメキシコ政治に関する従来の分析を修正せざるをえなく



なっていた。

「民主主義の秘儀」 ジョンスンの研究はそれまでのものにくらべると専門的、体系的であるとはいえないが、反面きびしい批判に満ちている。メキシコ内務省が彼を国外追放にしたほどである。ジョンスン（バジレットの弟子であるが）にとってメキシコの政治は「密教民主主義」ともよぶべきものであり、おどろくばかりの腐敗にみち、そこでは何もかもが売買の対象になる。彼は「集団」を分析の基礎におくが、このばあいの集団は党の三セクターを支える公式のものではなく、党内の、あるいは有力な政治家を中心としたクリケ、カマリーヤとよばれる非公式集団である。実質的意味のある政治闘争はこれらの派閥——多数者の利益がここに代表されているというわけではない——の間を生じ、その他の勢力はこの派閥につながってくる。ジョンスンによれば、カルロス・マドラソ（Carlos Madrazo）による党改革の失敗と一九六八年事件こそ、PRI体制がもはや主要な政治運動家、政治勢力の全てを体制内に吸収できなくなっていること、もしくは吸収することを肯んじなくなっていることを示している。すなわちPRI体制崩壊の徴候であった。一九六八年事件はまたPRIから疎外されたグループが強化されつつあったことをも示している。反対勢力強化の主たる原因は支配勢力が当初よりかかかってきた社会的公正という目標が全く達成されてこなかったことにある。そのため体制の正当性の基盤は著しく侵食されていた。メキシコの政治システムの将来はうらやむにたるものではなく、発展途上国のモデルとなりうるようなものでは決してない。ジョンスンはそう結論する。

「革命から派閥連合へ」 ハンセンの研究はジョンスンのものよりはるかに学問的・体系的であるうえ、きびし

い批判を捨ててもない。経済成長の果実の分配は、同レベルの成長を示しているラテン・アメリカの他の国々にくらべて——その国々はメキシコのように“社会革命”をなしとげたことを誇りにしているわけではない——とりわけではないにしても同程度には不平等である。メキシコ“革命”は“社会的公正”という点で大きな進展があったことを意味するものではない。一方ではメキシコ経済の社会的に不正を放置したままの資本主義的近代化、他方では政治的安定、この二つをうまく両立させる政治制度を創出したことを意味するにすぎない。一九四〇年以来革命の成果が都市・農村の労働者という党の多数派セクターにはんのわずかし分配されていなかったこと、ハンセンはPRIを革命派閥連合が自らの利益を追求してメキシコの政治経済をコントロールするためのメカニズムだと定義したのである。PRIは三つのセクターの要求を代表し補完しているというスコットの見解はこれまでの事実によって裏づけられたものではなかったのである。

ハンセンはPRIの抑圧的存在によって統御されているかぎりメキシコの政治システムが民主主義的性格をもつにいたるとは考えられないとする。全ての経済プロジェクトがその可能性とは逆の方向で立案されている。PRIは表向きは“革命”の目的を完遂する役割を担っているが、別のかくされた機能をも果している。抑圧的で非民主的機能、不公正な分配を維持するという機能の方が実際には支配的であり、表向きの目標の成就をさまたげている。ハンセンの指摘するメキシコの政治システムの性格は、メキシコ人研究者には以前から明らかであったが、この時期になってはじめて北アメリカの一部の研究者がそれを重視するようになったのである。ハンセンは、仮にPRIが変るとしてもその変化は党内部から生まれるわけではなく、都市中産階級あるいは農民の不満から、いいかえれ

ば現在の安定が崩壊するところに生じるだろうと考えた。もっとも、一九六八年事件にもかかわらず、結局彼はこの可能性を疑っており、逆のことを予測している。すなわち、メキシコの政治エリートのたくみな「現実主義」はPRIを含む政治システムをこれまでと大差のない状態にとどめておくであろう。自らと農業工業エリートの利益のために大衆を支配しつづけながら。

「権威主義的制約のもとでの多元主義」一九七四年にステイブンス (Evelyn Stevens) が *Protest and Response in Mexico* (MIT, 1974) を出し、その中で一九五八―一九五九年の鉄道労働者の運動、一九六四―一九六五年の医者運動、一九六八年の学生運動を扱い、これら三つの抵抗運動がメキシコの政治システム全体にどのようなかわりをもったかを分析した。スーザン・カウフマンの前例同様、ステイブンスもファン・リンズ (Juan Linz) の定義——構造的に制約された多元主義——にしたがって、メキシコの政治システムは権威主義的であるという前提から分析をはじめている。ステイブンスの研究が有名なのは質の高さのゆえでなく——欠点が多いことでもよく知られている——権威主義に焦点を合わせたことによる。すなわち、PRIの役割はきわめて小さく、システムの抑圧作用は大きい。メキシコの政治が序々に民主化される可能性はほとんどなく、むしろ逆の傾向がみられるとしたのである。

リンズの権威主義理論を体系的に援用したのはスーザン・カウフマン・パーセル (Susan Kaufman Purcell) の学位論文 (一九七〇年) がはじめてである。これが一九七五年に *The Mexican Profit-Sharing Decision: politics in an authoritarian regime* (U. of California P., 1975) として出版された。彼女の研究の目的はリ

ンス理論のたすけをかりてロペス・マテオス (Lopez Mateos) 政権の利潤分配政策を分析し、メキシコにおける政策決定過程を明らかにすることであった。ここでは、権力のトップに焦点をあてるという研究方法のためであった。「公党」は、たとえ紛争調停能力をもつとはいえず、政策決定においても利益集約においても重要な役割を果たすとは考えられていない。リンスーカウフマン・パーセルの図式における中心変数は大統領である。党は完全に行政府に従属しており、システムの周辺に位置する。活動的メンバーを集め選挙民を組織するという能力では劣っているにもかかわらず、最も否定的な側面で北アメリカの政党に似た組織である。結局、政治システムの権威主義的性格は近い将来変りそうにないし、まして「公党」がその変化の原動力には決してなりえないと彼女は考えた。

「一九六八年—ユートピアの崩壊」 PRI にたいする北アメリカ人の見方は今では完全に変わっている。PRI がメキシコの政治のなかで中心的役割を果たしているという楽観的研究が一九五〇年代末から六〇年代末まで支配的であった。ブランデンバーグは例外だったのである。「公党」が主な役割を果たしているという考え方は、政治システムの非民主的側面が過渡的なものであるという判断と結びついていた。経済の近代化——これ自身は否定しがたい現象のように思われていた——が早晩大きな社会的変化・文化的変容をもたらし、その結果メキシコは民主主義に向うと考えられていたのである。一九六八年の危機が、多くのメキシコ人にとってもそうであったように、北アメリカ人研究者の態度を変えるのに決定的役割を果たしたように思える。ニードラーだけが古い図式にしがみついていたが、もはや彼の主張は大した影響力をもたなかった。かわりにハンセンの著作は「混血」という人種的要因をもちこむなど歓迎されるとはいえない手法を用いてはいたが、出版されるや否や直ちにスペイン語に翻訳され、

メキシコで大きな関心をもって読まれた。彼の業績によりメキシコの政治システムの権威主義的側面を強調する新しい波が高まり、PRIの役割が考え直されはじめた。「公党」の役割にたいする評価は低下し、政治発展についての楽観的見方は捨てられ、ついにメキシコ政治の将来をうらなう診断書から民主主義という字句が姿を消すのである。

“石油による改革” もっとも、このような悲観的見解は石油ブームがおとずれる以前のメキシコについてのものである。再び石油の大量輸出に立ち戻るのだとの決定がなされ、他方では政治改革が進められるという近年の劇的変化は末だ北アメリカ人の研究のなかに充分とり入れられていない。しかし、疑問の余地のないことが一つある。ブラボー川の向う岸の研究者がわが国の政治にたいしていただく関心は近い将来増すことはあっても減ることはなからう。彼らは多様な見解を次々に打出してくるであろう。隣国の学界は、イランでの苦い経験をくりかえさなために、可能なかぎりのことを試みるであろう。不意をつかれるのをなんとか避けようとするであろう。われわれの政治の将来がどのようなものであれ、われわれを注視している北アメリカがそこに存在すること、これだけは確かである。そして、PRIが存続するかぎり——その大統領は二一世紀にむけて準備をととのえるべく党員に注意をうながしたばかりだが——北アメリカ人はPRIの“実体”をえぐりつつけるにちがいない。